高等小學讀本 卷三

女子用

文部省

36
810
昭2

41668

教科書文庫

4
810
32-1927
20000
80487

資料室

教科書文庫
4
810
32-1927
2000080487

高等小學讀本 卷三

女子用

文部省

広島大学
教
80487
図書

広島大学図書
2000080487

3b
810
HB2

目錄

第一課　春晴千里……一
第二課　五百羅漢の畫幅……七
第三課　文字……十一
第四課　鳥の聲……十七
第五課　感情……二十一
第六課　ペスタロッチ……二十五
第七課　川柳……三十三
第八課　雀……三十四
第九課　歸宅の日取を聞合はす……三十七
第十課　小野寺十内の妻……四十
第十一課　西洋の家庭……四十四
第十二課　望遠鏡と顯微鏡……四十九
第十三課　バクテリヤ……五十三
第十四課　甲冑堂……五十六
第十五課　租稅……六十一
第十六課　水と風景……六十五
第十七課　天然記念物……六十八
第十八課　慈善家キャサリン……七十五
第十九課　夏の曉……七十九
第二十課　鏡……八十二
第二十一課　溫泉を問合はす……八十四
第二十二課　夕立雲……八十六
第二十三課　地震……九十三
第二十四課　月見草……百
第二十五課　日本の風土……百二
第二十六課　ビクトリヤ女帝……百六
第二十七課　罐詰……百十
第二十八課　落日……百十五
第二十九課　待賢門の戰……百十六
第三十課　興國の民……百二十二

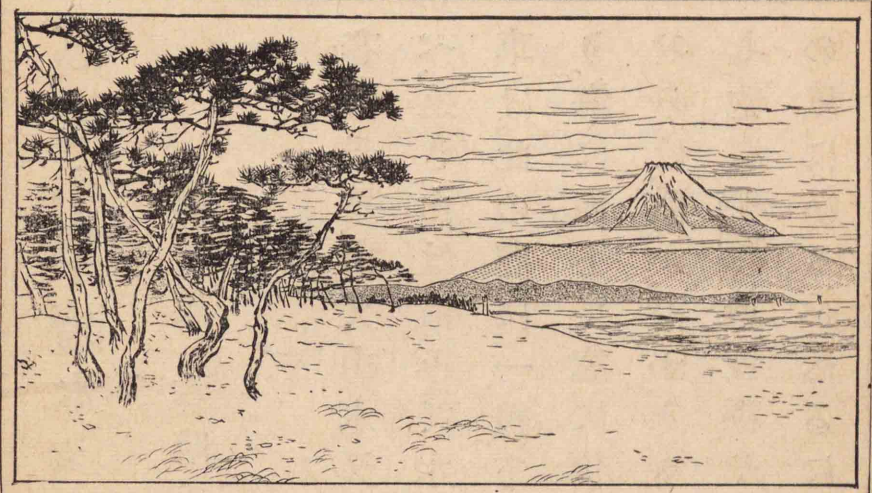
高等小學讀本 女子用 卷三

第一課　春晴千里

一

春晴千里、山又山、水又水。近き水は澄みて山の綠を浮かべ、遠き山は霞みて水に藍を流す。東京を發せし我が汽車は、此の間に一線を引きて、今や東海道を下りつゝあり。海に面して窓に倚る客、筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、そもく繪か。

七砲臺（品川舊砲臺）邊波穩やかにして、高く低く群飛ぶ鷗、落花の風にひるがへるに似たり。帆を半ば張りて出で行く



舟あり、櫓を操りて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に消えて探れども見えず。

松青き處、色どり添ふるに桃の紅なるを以てす。自然は是等の美を贈りて旅客を慰め、詩人は其の美を詠じて春に謝せんとす。藤澤の野、山北の谷、人々唯美しと叫ぶ。

三保の松原けむりわたりて、春は繪の如し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮立つ雲、何ものか造

化の妙筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。遠くかすかに横たはれるは伊豆なるべし。富士は水彩もてゑがかれたるが如く、窓の右に立ち、又左に現る。

平原十里、麥は綠に、菜の花は黃なり。熱田の社を左に見て春風に吹かれ行けば、名古屋の城はまがはぬ影を見せ初めたり。

彦根去り、草津來り、瀨田川を渡れば、京都も早近くなりぬ。朝日將軍の遺蹟は何れの處ぞ。霞に包まるゝ遠近の山影、或は淡く或は濃く、鳰の浦風波に眠りて、粟津の松原獨り昔に似たり。

東寺の塔は我を迎へて立ち、賀茂川の水は我を迎へて歌ふ。慕はしき母に會ひ、懷かしき妹と語るに似たるは、何時も京都に着きし時の心地なり。

二

山紫に水明らかなる處、唯夢の如く現の如く、三條を渡り四條を渡ること日に幾度ぞ。つゝじを柴に折添へて戴き連れたる大原女も、何時しか我が友となれり。如意嶽より吹來る春風は、輕く我が袖を拂ひ、又堤の柳を吹く。

打續く晴天に、都の人々は春にあこがれて、西へ東へと群行く。さし續けたる日傘は、橋の欄干と共に水に影を

落せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前を滿たしぬ。舞臺の上より見下す人、舞臺の下に咲誇る花、恰も一幅の四條畫なるに、老婆は此の間に立ちて、「わらび餅召せ。」など呼ぶ。

西山の花見る人は、多く先づ御室を指す。松青く樓門赤く、茶を煮る煙絶えぐにあがりて、花極めて白し。塔は霞をもれて松風の外にそびえ、鐘樓は昔を說きて香雲の中に包まる。讀經の聲遠く響きて、鶯の歌高きこずゑに在り。

重る岩根を踏みしめて生ひ立つ松、其の間を點綴して咲誇る花、嵐山の春こそ今たけなはなれ。小舟に乘りて

漕行く人あり、岸の此方にて眺むる人あり。一筋の渡月橋は花の如き人を載せて虹の如く、散る花は風に漂ひて主なき筏に落つ。坂を登りて大悲閣に到れば、眼下に廣げらるゝ一卷の繪卷物、柳櫻をこきまぜて、恰も錦を織出せる如く、又友禪を染めなせる如し。

途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。

夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。

暮色は東山をこめ、叡山を廻り、漸う賀茂川におそひ來れり。清水の塔も半ば隱れぬ。大文字の跡も姿を隱しぬ。紅に紫に藍に墨に見る〳〵彩られ行く山影、薄く濃く青く黑く消され行く人影、詩中のものならぬはなし。天地唯平和、四望唯寂寞、顧みれば西山も無く北山も有らず。（天和田建樹「雪月花」ニ據ル）

第二課　五百羅漢の畫幅

深川の本誓寺に五百羅漢の畫幅あり。畫は歷史畫家と

して有名なる菊池容齋が、苦心慘澹の筆に成りし大作にて、春秋の彼岸には、之を懸列ねて供養し、普く世人の參拜を許す。容齋が此の畫をかきしにつきては、哀なる物語あり。

抑今日廣く世に行はるゝ「前賢故實」は、容齋が畢生の心血をしぼりてゑがきなし、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも明治天皇が日本畫士の號を賜ひしもこれがためなるべく、また和氣の清麿に神號を追贈あらせられしも、或は此の書が其の動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初は此の十年苦心の作も、發行の書肆なく、上木の資財なく、久しく筐底に籠めて、徒に紙魚のすみ

かとなるを待つばかりなりしかば、此の事餘りに情なく、折節は年來の親友なりし福田行誡に向ひて、堪難き遺憾の情を漏らしたりき。

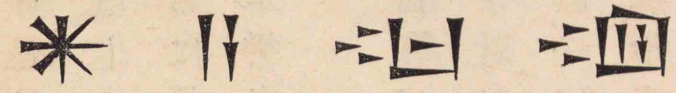
其の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり。手の中の珠と慈みし一人の娘年頃になりしかば、或方に嫁入らせしに、幾程もなくして身まかりぬ。婚禮の折持參の衣服調度、今は此方に置きてもせんなし、唯歎の種ぞとて、婿の方より里方に返す。里方にては受取らず、「一旦遣はしし娘の道具は卽ち其方の物、それを返さるゝは死したる者を離緣せらるゝやうにて、草葉の陰にも如何ばかり悲しからん。これは其方へ。」「いや、其方へ。」と押問答

の果、金兵衞は腕こまぬきて、「さらば我に思案あり。今深川におはす行誠上人は、淨土宗の大德、古今の名僧と聞くに、此の聖に託しまゐらせば、衆生濟度の便ともし給ひて、なき娘が往生の緣ともなりぬべし。」といふに、卽ち相談は決し、彼の調度を賣りて一千兩の金を行誠に捧ぐ。さてこそ行誠は容齋を招きて、「喜ばれよ、御身の志は成りぬ。印刷の料は調ひたり。」とあるに、容齋は涙ぐむまで有難く、脫稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかゝりしなりけり。斯くて年來の宿望は漸くこゝに遂げられたりければ、「如何にしてか此の大恩に報ゆべき。」と尋ぬるに、行誠は、「善いかな。さらば五百

羅漢の畫をゑがきて供養し給へ。亡者の爲、施主の爲、如何ばかりなる功德ならん。」といふ。「それこそ我にはふさはしき業なれ。如何にもして加藤氏の名を萬世に傳ふるに足るものを。」と、沐浴齋戒してかき上げたるが、此の本誓寺の什物なりとかや。（藤岡作太郎「國文學史講話」ニ據ル）

第三課　文字

我等が、前代の事を知り、現時の世態を悟り、又廣く思想を社會に通じ、更に之を後人に傳へることの出來るのは、一に文字の賜物である。文明が時代を追うて次第に進歩するのは、其の大半は之を文字の功に歸しなければならない。



ム飲　口　水　星・天

文字とは、思想を書記する符號であつて、然も多數の人の間に認められ、共通に用ひられるものである。太古、人は繩を結んで約束のしるしとしたことがある。今でも野蠻人の中には、樹枝を切つて種々の長さとし、通信・備忘の用に供するものがある。しかし是等はまだ文字と稱することは出來ない。文字として認むべきもので最も早く發明せられたのは、楔形文字及び漢字。エジプト文字である。楔形文字はアジヤの西部に行はれたもので、今は僅かに古い碑などに殘つてゐるに過ぎないが、漢字

やエジプト文字は其の後大いに發達變化して、現今世界の主なる國に行はれる文字となつた。

漢字には、日・月・山・水・魚・鳥・木のやうに、物の形に象つて作つたものもあり、木の上に一畫を加へて末、下に一畫を加へて本の意味を表したやうなものもある。木を二つ合はせて林、三つ合はせて森とするが如き、又日と月を合はせて明とするが如きは、數字を合はせて一

つの意味の文字を成すのである。各に宇冠又は木偏を添へて客・格とし、官に竹冠又は食偏を添へて管・館とする如きは、各特殊の意義を示すけれども、其の音は元の各・官によつて示されてゐる。漢字の構造は種々である。」

我が國は古く支那の漢字を輸入し、之を用ひて物事を記してゐたが、後、假名文字を製作して、漢字とあはせ用ふるやうになつた。片假名は漢字の一部分を割いて作つたものであり、平假名は漢字の草體から發達したものである。

漢字はもと物の形に象つて作つたものであるが、其の後時代と共にいろ〳〵に發達變化して、今では其の由

來のわからないものが多く、字數も五萬を超えてゐる。

エジプト文字も漢字と同じく、物に象つて作つたものであるが、其の後著しい發達を遂げなかつたため、終に繪畫の域を脱するに至らなかつた。しかし其の影響は甚だ大なるものがあつて、今日ヨーロッパ及びアメリカ諸國で用ひるローマ字も、此のエジプト文字から變化したものである。

楔形文字・漢字・エジプト文字の如きは、物の形に象つた文字であるから、象形文字といひ、又一字がそれ〴〵意義を有するから、意字ともいふ。假名文字及びローマ字の如きは、もと象形文字から發達したものではあるが、

A	a	𝒜	𝒶	N	n	𝒩	𝓃
B	b	ℬ	𝒷	O	o	𝒪	𝓄
C	c	𝒞	𝒸	P	p	𝒫	𝓅
D	d	𝒟	𝒹	Q	q	𝒬	𝓆
E	e	ℰ	ℯ	R	r	ℛ	𝓇
F	f	ℱ	𝒻	S	s	𝒮	𝓈
G	g	𝒢	ℊ	T	t	𝒯	𝓉
H	h	ℋ	𝒽	U	u	𝒰	𝓊
I	i	ℐ	𝒾	V	v	𝒱	𝓋
J	j	𝒥	𝒿	W	w	𝒲	𝓌
K	k	𝒦	𝓀	X	x	𝒳	𝓍
L	l	ℒ	𝓁	Y	y	𝒴	𝓎
M	m	ℳ	𝓂	Z	z	𝒵	𝓏

音のみを表す文字であるから、音標文字又は音字といふ。音字はそれ自身には意味は無いが、それによつて言語を書表すことが出來る。

第四課　鳥の聲

寢床を出ると、琵琶湖の見える部屋に行つてみる。朝日が部屋一ぱいにはいつてゐる。

湖水と思はるゝ邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。部屋の下は東谷で、我が目よりやゝ高くやゝ低く、數知れぬ杉のこずゑがほこのやうに突立つてゐる。左手には、北谷の向ふに當る峯がのこぎりの齒のやうな杉を背に並べて、湖

の方に流れてゐる。空氣が清い上にも清いので、近景の杉のこずゑも遠景の杉の峯も、新鮮な色をしてゐる。さうして其の間を薄い霞が流れてゐる。非常に靜かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。唯此の天地を我が物顔に鳴きさへづつてゐるのは、小鳥だ。何といふかはゆい聲の小鳥があるものであらう。名がわからぬのが殘念だ。其處の杉のこずゑで一羽鳴いてゐる。向ふの杉のこずゑで他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、尙二三羽の聲が何處かで聞えるやうだ。此の小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が突然其の間に高音を張

る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又りゝしいところがあつて、其の音の空山に響く趣が何ともいへぬ。これも名がわからぬのが殘念だ。それも一羽ではない。三羽、四羽と、聞く中にだん〳〵殖えてくる。前の小鳥の聲が縱絲なら、此の小鳥の聲は横絲だ。互に入りまじつて、よく調和を保つところがおもしろい。突然けんけんけんと、けたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。或は山鳥であらうか。前の二つの小鳥が織成した美しい絹を、唯一聲に引割いたのかと疑はれる。しかし暫くして、其の聲は谷の底の底、峯の奥の奥にしみ込

んでしまつて、其の後は元の通り靜かになる。眞先に其の靜かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれるかすりのやうに美しい。一のかすりが置かれると、又縱絲を織つて前の小鳥が鳴く。又横絲を織つて次の小鳥が鳴く。かすりが鳴く。縱絲が鳴く。横絲が鳴く。此の絹を又山鳥の聲が破るのかと思ひながら待ちまうけてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の堂の鰐口が口を明いてつぶやくのかとも疑はれる。他の鳥の聲が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのがおもしろい。一人の友はきつゝきだらうといつた。他の友は山鳩だらうといつた。

琵琶湖の上には、まだ漠々たる白雲が漂うてゐる。杉のこずゑを流れる霞は少しづつ薄らいで來て、だんくと谷が深く見えてくる。（高濱清「新寫生文」ニ據ル）

第五課　感情

人々の互に親愛するも、憎惡するも、尊敬するも、侮慢するも、主として感情の發動に基づくものなれば、感情の修練は人格修養の要件にして、處世上最も緊要なる事なり。仁愛慈惠は至善至美なる感情なれば、人は力めて此の感情を養ひ、常に他人の喜を以て我が喜とし、他人の憂を以て我が憂とするの精神を有すべきなり。然れ

ども愛情の發動に任せて他の德義をゆるかせにし、或は其の好む所に偏して公平を失するが如きことあるべからず。

憎惡怨恨は交情の離反する基なり。故に此の感情の抑制には、絶えず意を用ふべし。人眞に我を憎むとも、我之に接するに慈愛の心を以てせば、其の人の心は自ら解くべく、眞に怨むべき人ありとも、怨に報ゆるに德を以てせば、其の人終に悔い謝すべし。怨に報ゆるに怨を以てするは、火を以て火に加ふるが如し。益、其の勢を長ぜんのみ。子貢、一言にして終身行ふべきものを問ひしに、孔子、恕の一字を以て答へたり。此の一字を守ること堅

ければ、憎惡怨恨に心を苦しむることなし。我若し他人の憎惡怨恨を買ふことあらば、我が智德の及ばざるを恥ぢ、反省して益、修養の功を積むべきなり。

一時の憤怒を忍ぶ能はずして一身一家を滅したるもの、古今東西其の例に乏しからず。實に恐るべきは憤怒の情なり。人怒る時は感情益、激するを以て、言行自ら常軌を逸し、冷靜の我にかへりて後悔すること多し。西諺にも、「怒の最後の瞬間は後悔の最初の瞬間なり。」といへり。怒るとも直ちに之を言動に發することなく、先づ心を冷靜にして、然る後徐に之に對する處置を考ふべきなり。人を叱るにも決して怒るべからず。怒りて叱る時

は、言動自然に粗暴に流るゝを以て、人我に服せず、我自ら我が品位を下すのみ。怒を遷さざるも亦頗る難事にして、修養至れる人にして始めて之を能くす。故に顔回怒を遷さずとて、孔子はいたく其の賢なるを稱せり。

他人の成功利達を見て不快を感ずるを、嫉妬といふ。無能なる弱者の有する感情なり。此の感情強きものは、人に排斥せられ、人と事を共にすること能はず。不幸にして我が心に此の感情の萌芽を認むるあらば、速に之を根絶するに力むべし。他人の美點長所は力めて之を推奬し、缺點短所は捨てて顧みざれ。

憂懼は危險に伴なふ感情なり。天變・地異・疾病・災厄は何

時我が身邊に襲來せんも測り知るべからず。唯己が智能の及ぶ限を盡くして、然る後天命に任するものは、よく憂懼に遠ざかる。血氣の勇に逸りて死を顧みざるものは、共に謀るに足らず。又我が膽勇を示さんとして、みだりに危險恐るゝに足らずといふものは、獨り自ら快しとするも、識者の笑を免れず。危險を侮るものは眞の勇者にあらず。

第六課　ペスタロッチ

山水の美を以て鳴るスイスのチューリヒ市街頭に、粗服をまとへる一人物の、貧しげなる兒童を伴なひて立てる銅像あり。これ教育界千古の偉人ペスタロッチを記念

せるものなり。

ペスタロッチは西暦一千七百四十六年を以てチューリヒ市に生まれ、六歳父を失ひ、母の手一つに育てらる。幼き時より品性純良にして、人を愛するの熱情に富み、長ずるに及びて、救世濟民の念頗る盛なり。初め僧たらんと志して得ず、法政の學を修めしかども亦成らず、次いで荒蕪の地を開墾して貧民に産

業を授けんことを企てしが、此の事業も亦失敗に歸し、其の全財産を失ふに至れり。

こゝに於て一種の學校を作り、貧民の子弟を集め、農業に從事せしむると共に教育を施ししが、兒童の多くは怠慢にして勤勞をいとひ、食にあき暖を得れば遁走を企つる者さへ少からず。誠意に出でたる此の事業も、却つて非難の聲を以て報いられ、遂に學校を閉づるのやむを得ざるに至れり。然も堅忍不拔なるペスタロッチは、毫も失望することなく、自ら思へらく、此の失敗は余が計畫の粗漏なりしことを悟らしめたりと。これより蟄居十八年、專ら文章を以て世道人心に益せんことを力

め、一書を著して、教育の淵源は家庭にあり、家庭の中心は母にあり、母賢なれば家とゝのひ、一家とゝのへば一鄉治り、延いて全國の民風自ら純良の域に進むべしとの意を寓せり。此の書忽ちフランス・ドイツの諸國に傳はり、人をして教育のゆるかせにすべからざるを知らしめたり。プロシヤの王妃ルイゼ、かつて難をロシヤに避くるの途、之を讀みて曰く、「我若し自由の身ならんには、自ら往きて此の人を訪ひ、全人類の名を以て深謝の辭を述べんものを。」と。

當時スイスも亦フランス大革命の餘波を受け、戰亂處處に起り、家を燒かれ親に離れて流離する者多く、スタ

ンツの町特に甚だし。ペスタロッチ卽ち單身スタンツに赴き、廢寺を以て學校とし、專ら兒童の教育に從事せり。此の時住民の窮乏は實に其の極に達し、子弟の教育の如きは何人も之を顧みる者なかりしかば、百方勸誘して八十人の兒童を得たり。其の中には、手足悉く吹出物におほはるゝ

あり、全身にしらみのたかれるあり。ペスタロッチは毫も之をいとはず、常に兒童と起居寢食を共にし、夜は兒童の熟睡するを見て始めて寢に就き、病に罹る者あれば、看護到らざる所なし。其の心勞察するに餘りあり。幾何もなくしてスタンツは再び戰場となり、其の學校は戰時病院として收用せられ、ペスタロッチはやむを得ずしてブルグドルフに移れり。

ペスタロッチのブルグドルフに至るや、自ら請ひて其の地の貧民學校の補助教師となりしが、同僚の忌む所となり、イバーダンに移れり。此の頃に至りて、ペスタロッチの精神的事業は漸く社會の注目する所となり、學者・教育家は言ふに及ばず、貴人の來り訪ふ者相次ぎ、ヨーロッパ諸國の政府も亦視察員を送るに至れり。ペスタロッチ大いに感奮し、老の其の身に至るを知らず、朝は二時に起き、先づ筆を執りて著述に從ひ、然る後課業に臨み、參觀の客到れば、諄々として說明して毫も倦むこと無かりき。斯くて西曆一千八百二十七年、八十二歲にして歿せり。

ペスタロッチの一生は、奮鬪努力の歷史なり。而して其の逸事の傳ふべきもの亦少からず。フランス公使のかつてイバーダンの學校を參觀せし時なりき。當時ペスタロッチは劇烈なる關節炎を患へて床中に在りしが、病を

力めて各教室を案内し、熱心に説明せしに、何時しか病苦を忘れて、遂に健康を回復せりといふ。又ロシヤ皇帝に謁見して教育の意見を述ぶるに當り、身の貴人の前に在るを忘れ、席を進めて帝の衣端をつかまんとして顚倒せしことあり。又或冬の日、乞食のはだしにて窓下を過ぐるを見、直ちに己が靴を脱ぎて之に與へ、己は藁を編み足にまとひて登校したりといふ。

ペスタロッチの偉大なるは、其の學術にもあらず、其の事業にもあらずして、實に其の精神にあり。彼は眞に人を愛せり。而して眞に人を愛するの道は、善く之を教育するにあるを信じたり。此の愛情と信念とを以て、終始一

貫、心身を捧げて教育の爲に盡くししなり。チューリヒ市街頭、行人旅客をして其の像下に低回俯仰せしむるもの、眞に故なきにあらず。

第七課　川柳

武藏坊とかく支度に手間がとれ
義貞の勢はあさりを踏みつぶし
尊氏はとはうづもなく逃げて行き
道問へば一度に動く田植笠
寢てゐても團扇の動く親心
長話とんぼの止る槍のさき
取次に出る顏のないすゝはらひ

黑犬をちやうちんにする雪の道
雨宿り額の文字をよく覺え
犬を見て猫は背中へ腹をたて
いゝ着物着ると内でもかしこまり
はしご賣まけると屋根へ掛けて見せ
知つた人ばかりへ强ひる子の給仕
いゝ所へ來たと背高使はれる
人を汲出して井戸がへしまひなり

第八課　雀

私は獵の歸りに並木道を歩いてゐた。犬は私の前を走つてゐた。突然きざみ足になつた犬は、獲物をかぎ附け

たやうに忍びやかに歩き出した。
向ふを見やると、道の上に、嘴のわきの黄色い、頭の上に綿毛の生えた、一羽の子雀が居る。風がひどくて並木の樺の木が搖れてゐるから、巣から落ちたのであらう。其處にじつとすくんだまゝ、まだ羽の生え揃はない翼を力無げに廣げてゐる。
犬はそろ〳〵とそれに近づいて行つたが、其の時、突然すぐ傍の木から、親雀がちやうどつぶてのやうに、犬のつい鼻先に飛下りた。全身の毛を逆立て、哀な絶望の叫を擧げながら、犬の口を目がけて二度三度飛びかゝつた。

親雀は雛を助けようと思つて、身を以てかばつたのだ。が、恐怖のために、其の小さな體は戰き、其の聲はかすれてゐた。恐しさに氣を失ひながらも、彼は身を投出したのだ。

彼の目には、犬はどんなに大きな怪物に見えたことであらう。それでも彼は、安全な高い枝に止つてゐることは出來なかつた。其の安全を願ふ心よりももつと強い力が、彼を飛下りさせたのだ。

私の犬は立止つた。さうして後じさりした。彼も亦此の力を認めたに違ひない。

私はまごくしてゐる犬を急いで呼返し、靜かに其處

を立去つた。

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。――私は此の小さな鳥の悲壯な態度に對して、其の愛情の衝動に對して、敬虔の念に打たれたのである。

第九課　歸宅の日取を聞合はす

御出發後とかく雨がちに御座候處御地は如何に候や一昨日着の御葉書によれば御祖父様の御病氣も大層宜しくいらせられ候由皆様も何程か御安心あそばされ候事と御察し申上候殊に母上様には久々にての御いでとて御病人もさぞかし御喜びなされ候事と存

候御祖父様は平生御丈夫の方に候へば遠からず御全快の御事と存上候御留守中誰も誰も變りなく次郎も毎日元氣よく遊び居り候へば御安心なし下されたく候さて昨日突然北海道の鈴木様御夫婦にて御いでなされ候が母上様の御不在にて非常に落膽なされたまたまの歸郷なれば何とかして御目にかゝりて歸りたしと申し居られ候御滯在は月末までの御見込の由にて若しそれまでに母上様御歸宅のやうならば今一度御立寄なさるべしとの事に御座候就いては御歸宅の日取

若し御きまりに候はば御申し越し下されたく御手紙次第私より鈴木様まで申し上ぐるはずに致し置き候御病人の御様子にもよる事に候へば今より御取りきめもむつかしからんとは存上候へどもおよそのところにても早く御知らせ願はれ候はば何よりと存候先づは御留守中の様子申し上げかたぐ右御尋ねまでかしこ

年　月　日

母上様　御許に

とし子

第十課　小野寺十内の妻

つまや子の待つらんものを急がまし
何か此の世におもひおくべき

此の哀なる一首を辭世として、夫と子との後を追へるは、赤穗四十七士の一人小野寺十内秀和の妻丹女なり。丹女の里方は灰方氏、兄藤兵衛は十内と同じく淺野家に仕へしが、義擧にくみせず、藩中離散の後、何時しか秀和とは音信不通となりぬ。次の兄喜兵衛他家を嗣ぎて江戸に在りしを、秀和おとづれしかども、藤兵衛より言越しし旨もあればとて、これまた遂に面會せざりきとぞ。里方の兄たちの斯くありしにも似ず、丹女の心正しく義氣ありしは、よく其の夫の行に類へり。二人の間に子無かりしかば、秀和の姉の子幸右衛門秀富を子として養ひしが、これも四十七士の一人にて、元祿十六年二月、夫は細川邸に、子は毛利邸に自刄して果てぬ。夫と子との義烈、我が里方のふがひなさ、獨り京都に殘りゐて、これを思ひ彼を思ひし丹女の心の中、あはれ如何ばかりなりけん。同じ年の六月、丹女も亦食を絶ちてみまかりきとなり。

四十七人の義士何れもすぐれたる人物なるが中に、秀和は文學の道にも暗からず。伊藤仁齋に就きて經義を尋ねしことあり。又和歌にも堪能なりき。丹女も亦風雅

の嗜淺からず、春風の題にて、

咲初むる外山の櫻にほひ來て
　ひとおどろかす春のあさ風

磐瀬といふ名所の題にて、

暮れて行く秋といはせの山風に
　もみぢかつ散る音のさびしさ

これ等の歌を以て、其のよみぶりを知るべし。秀和が江戸への道すがら、

別れてもまたあふ坂を頼まねば
　たぐへやせまし死手の山ごえ

故郷に斯くてや人の住みぬらん

ひとりさむけき志賀の浦松
別れ行く思の雲のたちそふや
　けふもしぐるゝあづま路の空

より〳〵に都に歸る旅人の
　數にもれなん身の行方かな

などの歌につけて、丹女の返歌も如何に悲しかりけん。秀和の手紙に、「そこもとの歌、さて〳〵感じ入り候。涙せきあへず。」とあれども、其の歌の傳はらざるこそうらみなれ。

秀富の母は卽ち義士大高源吾忠雄の母なり。源吾の姉の子岡野金右衞門包秀、これも亦義士の一人なり。一族

擧つて義に殉ぜしこと、思へば〳〵尊し。

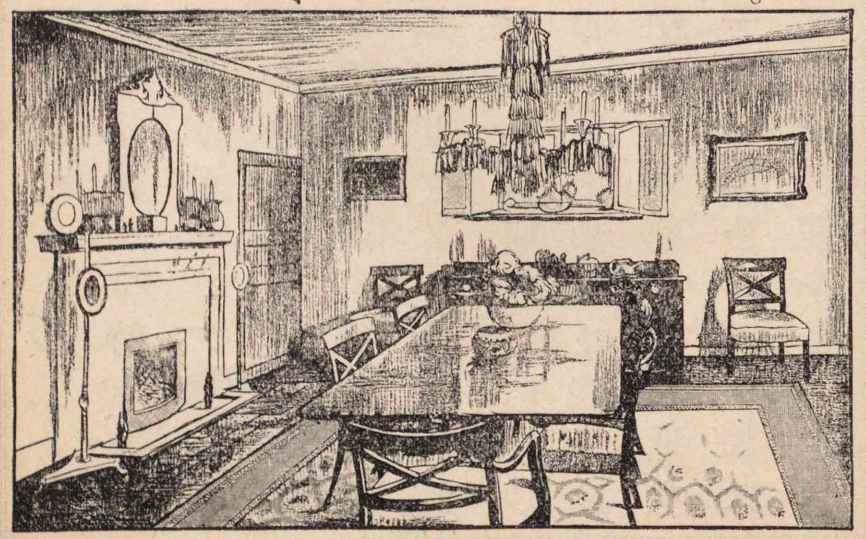
第十一課　西洋の家庭

西洋の客間の様を見ると、壁に掲げた油繪、机の上の花瓶、祖先から傳はつた器具、名譽の記念物はいふに及ばず、知人の寫眞や、遠方からの到來物や、皿・鉢までも處せきまで陳列してあつて、恰も小博物館の觀を呈してゐる。日本の座敷、床の間の飾の清楚にして趣の深いのに引きかへて、賑はしくはでやかである。窓掛の房の重げに、絨氈の色の鮮かなのは、日本の障子や青疊のさつぱりしたのとは、見た感じが全く違つてゐる。

西洋では、客間と食堂と寢室が皆別々になつてゐるの

が普通である。食事の時には、合圖の鈴などを鳴らす處もある。

朝食は、ドイツ・フランスなどでは大抵パンとコーヒーで濟ますが、イギリスでは冷たい肉、いぶした魚なども食ふ。晝食を主な食事とする國もあり、夕食を第一の食事とする國もあるが、イギリスなどでは、夕食の卓に着く時は、同じ家内の者でも、顔を洗ひ、髪をくしけづり、衣服を



改める。食事中は打ちくつろいで談話するが、少しも禮儀を亂すやうなことは無い。知人を招待する時も、家内一同と食事を共にする習はしで、日本のやうに、主人だけが客と膳に向ふのではない。招かれる人も、其の家族一同と睦び合ふのを樂しみとして來る。食事後の談話時は最も樂しい時間で、主婦や娘がピヤノを彈ずれば、一同が歌を歌ひ、又樣々の室内遊戯をする。

食卓の世話は主婦たる人の役目で、肉を切つて盛分けて、一同に分ちなどする。料理も中流の家庭では、大抵主婦が自らこしらへるので、然も一片の肉をいろ〳〵に使ひ、くづが出れば、其のくづで又別な料理をこしらへ

るといふ風に、少しも物をむだに使はぬ。家の經濟を能く立てて行くことが主婦の主要な任務であることは、東洋も西洋も古今共に變りはない。

日用の食品等を調へる場合にも、必ず籠を手にして市場に買ひに行くので、家に坐して、さかな屋・やほ屋等の出入を待つてゐることは無い。外出にもふだん着のまま出掛けることが多い。總べて衣服の類も割合に質素で、身分不相應の贅澤をする者は少いやうである。音樂を聽きながら、子供の守をしながら、又は汽車・電車の中などでも、婦人が絶えず編針を動かして毛絲を編んでゐるのは、外國に遊んだ人の直ちに目につくことで

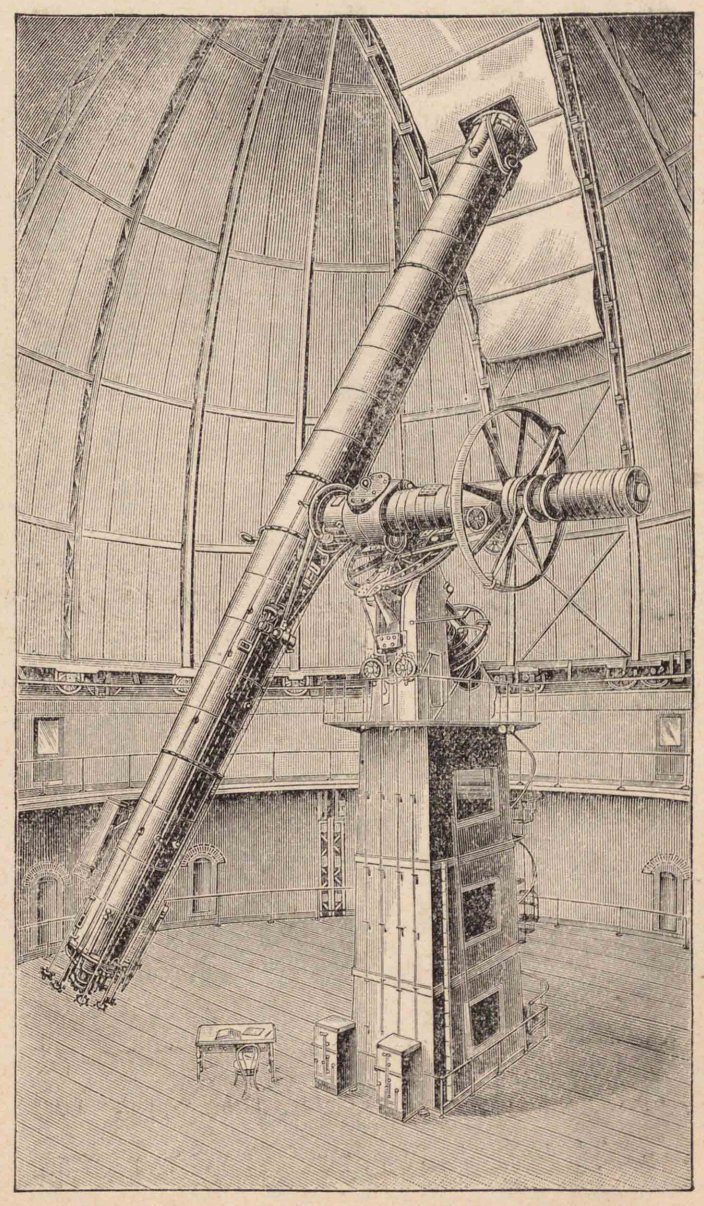
ある。男がボタンの落ちた服を着てをれば、妻がいくぢなしのやうにいはれるのは、ちやうど我が國で、綻の切れた着物を子供に着せておくと、母が笑はれるのと同様である。

ワイシャツやえりなどのよごれ物は洗濯屋へやるから、主婦の仕事は日本より少いやうに思はれるが、窓ガラスのふき清めや、絨氈の塵拂や、部屋々々の整頓・掃除など、日々の仕事にもなか〳〵骨の折れることが多い。しかし食事の時間に不意の來客も無く、客の來る毎に一一茶や菓子を出すといふ習慣も無いから、其の點は樂である。

第十二課　望遠鏡と顯微鏡

望遠鏡は、遠い處にある物體を近い處にあるやうに見せる器械で、最も精巧なのを用ひると、實距離の千分の一の處から觀望するのと同一の結果が得られる。それ故、約三十八萬四千キロメートルの遠い處にある月も、約三百八十四キロメートルの處から見るのと同じになる。此の器械は三百年程前オランダで發明されたもので、初は甚だ不完全であつた。イタリヤの星學者ガリレオが種々改良を加へてから頗る精巧になつて、終に星學の研究にも使用することが出來るやうになり、ガリレオは之を以て天體に關する種々の新事實を發見

した。太陽の表面に斑點のあること、月の表面に山のあることなどの明らかになつたのは、皆此の人の功績で



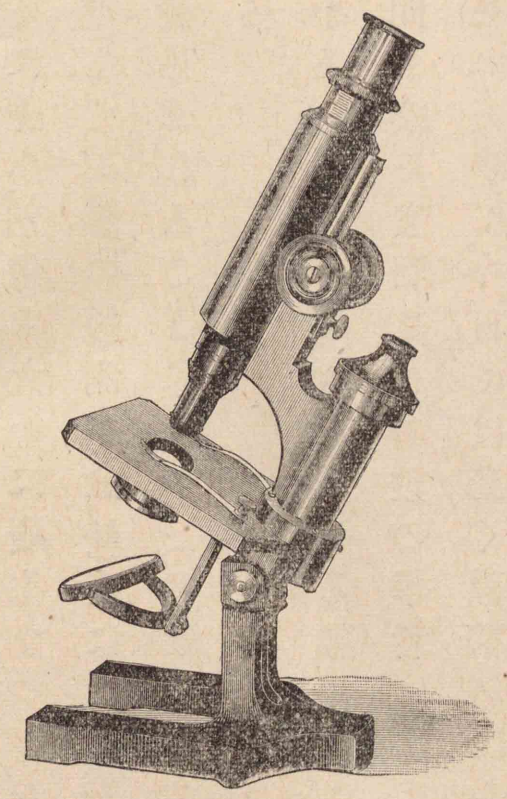
ある。

其の後も望遠鏡は漸次改良されて、其の構造の進歩するに隨ひ、効用も大いに廣くなつた。近時星學が非常に進んで、天體の觀測が愈〻精密になり、新しい天體も多く發見されることになつたのは、全く望遠鏡の賜物である。

小さいものを大きく見せる顯微鏡も、望遠鏡に續いて間もなく發明され、多數の學者によつてだん〳〵改良されたので、今日では驚く程精巧になつて、隨分微細なものまでも見ることが出來るやうになつた。

顯微鏡を以て蚊の口をしらべてみると、動物の皮膚に

穴をあけるきり。のこぎりのやうなものと、血を吸ふ管のやうなものが備つてゐることがわかり、蝶の羽に着いてゐる粉をしらべてみると、其の粉は悉く美しい羽毛の形をしてゐることがわかる。又海底の泥をしらべた結果、一立方センチメートルの中に十餘萬の動物が生活してをり、同じく一立方センチメートルの粘土の中に、約



百五十億の動物の遺體のあることがわかつた例がある。近時細菌學が大いに發達して、特殊の形質を備へたバクテリヤが種々の傳染病の病原となることも明らかになつたのは、全く顯微鏡の力である。

第十三課　バクテリヤ

バクテリヤは極めて微細な生物で、顯微鏡を用ひなければ見ることが出來ない。其の最も微細なものに至つては、數千倍以上に擴大しても、なほ之を見ることが出來ないものもある。

バクテリヤには、球狀のもの、短い圓柱狀のもの、螺旋狀のものがあつて、形は一樣でない。其の繁殖は大概自體

の分裂によるもので、外界の事情が最もこれに適するときは、約二十分乃至三十分毎に一回の分裂をする。今一時間毎に一回の分裂をするものと假定しても、一箇のバクテリヤは一時間の後に二箇となり、二時間の後には四箇となり、三時間の後には八箇となり、一晝夜の後には千六百七十七萬七千二百十六箇の大數となる。斯うして五日の後になると、其の容積は全世界の海洋をもうづめるくらゐになるであらう。しかし實際にはこんな大繁殖をする餘地もなく、又榮養分も之に伴なはないから、終には其の分裂を止めるやうになるのである。

バクテリヤは到る處に生存してゐる。其の人體に寄生するものの中には、無害のものもたくさんにあるが、コレラ・腸チフス・ヂフテリヤ・ペスト・結核等諸種の傳染病の原因をなすものもある。是等のバクテリヤは、實に人類の强敵といつてもよい。けれども健全な身體にはいつては繁殖することが困難なものであるから、我等は常に身體を健全にして、其の暴威をたくましうする餘地がないやうにすることが肝要である。

バクテリヤは其の種類が甚だ多く、中には何等の害を及さないばかりでなく、却つて人類の益を爲すものも少くない。酢・醬油・味噌・納豆などは醱酵によつて作られ

る食用品で、此の種の醱酵の作用はバクテリヤの力による。又バクテリヤの中には、地中に繁殖して植物の生育を助けるものもある。

物の腐敗するのはバクテリヤの作用であつて、我等人類の不利益となることが多いけれども、若し世に腐敗といふことがなかつたならば、果してどんな結果を見るであらうか。太古より今日に至るまで死滅した生物の屍は、地球上到る處に累々として、惨澹たる光景は實に見るに堪へないであらう。幸にして此の惨狀を見ないのは、主にバクテリヤの功といはなければならぬ。

第十四課　甲冑堂

奥州白石の城下より一里半南に、齋川といふ驛あり。此の齋川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、此の寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も住まず、あき寺となり、本尊だに何方へ取納めしにや寺には見えず。庭は草深く、誠に狐・梟のすみかといふも餘りあり。此の寺に又一つの小堂あり。俗に甲冑堂といふ。堂の書付には、故將堂とあり。大いさ僅かに二間四方ばかりの小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此の小堂の破損はいふまでもなし。漸うに縁に上り見るに、内に佛とても無く、唯婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。如何

なる人の像にやと尋ぬるに、佐藤繼信・忠信の妻のなりとかや。

これ今より百餘年前、橘南谿が「東遊記」に記せる所なり。」

繼信・忠信は源義經の家來なり。平家の盛なりし頃、義經は奥州に下りて身を藤原秀衡に寄せしが、兄頼朝の兵を擧ぐる由聞きて、急ぎて鎌倉へ馳參じぬ。繼信兄弟も從ひ行きしに、其の後義經京都へ攻上り、平家を追落して武功著しかりしかども、頼朝と不和になりて、再び奥州さして落延びたり。然るに繼信は屋島の合戰に能登守教經の矢にあたりて斃れ、忠信も京都にて討たれしかば、同じく從ひ出でたりし龜井・片岡等の人々は無事

にて歸國せしに、繼信兄弟は形見ばかり歸りぬ。母は悲しみに堪へず、せめて二人の中の一人にても歸りたらばと、悲歎の涙止む時なし。兄弟の妻は母の心根を察し、やがて夫の甲冑を取出し、勇ましげにいでたちて、母の前にひざまづき、「兄弟唯今凱陣致し候ひぬ。」と言ひしかば、母も二人の嫁の志を喜びて、涙ををさめてほゝ笑みたりとぞ。

繼信の、主と頼みし義經に忠なりしは、屋島の戰に教經の矢面に立ちて、主の命に代りしにても知るべし。義經は痛手を負へる繼信をいたはりて、「一しよにとてこそ契りしに、先立つることの悲しさよ。思ひ置く事あらば

言へかし。」といへば、繼信苦しげなる息の下に、「敵の矢にあたりて主君の命に代るは、弓矢取る身の習、更に恨にあらず。唯思ふ所は、故郷に遺し置きし老母の身の上なり。弟なる忠信をば、行末かけて召使ひ給へ。」とばかり言ひて、やがて息絶えたり。今はの一言に、母への孝心、弟への友愛、之を聞ける兵も皆鎧の袖を絞りぬ。弟の忠信が吉野の山に踏止りて多勢の敵と戰ひ、義經を落しやりし武勇義烈は、兄にも劣らずといふべし。妻なる二人の婦人が、深き悲しみを押包みて母を慰めんとせし健氣さ、雄々しさ、打揃ひての忠孝、世にもめでたき例ならずや。時の人の其の姿を木像に刻みて此の堂を建てしも、

故あるかな。こゝに詣でし俳人の句に、

軍めく二人の嫁や花あやめ

卯の花やをどし毛ゆゝし女武者

明治八年、此の小堂火災に罹り、像も共に燒失せたりとぞ。

第十五課　租税

國民の福利を增進し、安寧秩序を保持するため、國家として爲すべき事業は甚だ多い。是等の事業を遂行する費用に充てる目的を以て、人民より徵收する財貨を、租税といふ。政府の收入には、手數料・官營事業の收益などいろ〳〵あるが、其の過半を占めるものは、卽ち此の租

税である。

國家に於けると同様に、府縣市町村に於ても、各其の地方自治團體の繁榮を圖り幸福を進めてゆくためには、諸種の施設經營が必要であるから、其の費用に充てる目的を以て租税を徴收する。

昔は東西何れの國でも、租税として現品を徴收したり、勞力を賦課したりしてをつたが、此の方法は政府にもまた人民にも種々不便があるので、今日の文明諸國では、皆貨幣を以て之を納めるやうになつた。例へば我が國でも、古く租庸調の制度があり、德川時代になつても、大抵現品又は勞力を賦課して來たが、明治維新以後は、

各種の租税は概ね貨幣を以て納めることとなつた。

租税の中で、地租・所得税・營業收益税・相續税・酒造税・關税等、政府の徴收するものを國税といひ、國税附加税・家屋税等、府縣の徴收するものを府縣税といひ、國税・府縣税の附加税、及び戸數割等、市町村の徴收するものを市町村税といふ。

國税には直接税と間接税がある。地租・所得税・營業收益税の如く、直接之を納める者の負擔に歸する租税を直接税といひ、酒造税の如く、之を納める者は製造人であるけれども、實際の負擔は間接に消費者の上にかゝる租税を、間接税といふのである。關税も亦其の性質は後

者に屬する。

租税は、課税標準を定め、之に一定の税率を乘じて算出するのである。課税標準は租税の種類によつて異なるのであつて、例へば、地租に於ては地價、所得税に於ては所得金額、酒造税に於ては酒類の製造石數等の如きものが、課税標準となるのである。

一家の繁榮するに隨ひ、其の經費が增加すると同じく、國家に於ても、地方自治團體に於ても、其の繁榮に伴なつて經費が膨脹し、國民の負擔すべき租税の增加するのは、固より當然の事である。我が國に於ても、明治二十七八年戰役前の租税收入は僅かに七千萬圓に過ぎな

かつたが、明治三十七八年戰役後には貳億八千萬圓になり、世界大戰後には七億參千萬圓に增加し、大正十四年度には實に八億九千萬圓の巨額に上つた。

租税は國民生活に直接影響するところが大きいから、新に租税を賦課し又は税率を變更するには、國税に於ては帝國議會の協贊を要し、府縣税・市町村税に於ては それ〴〵府縣會・市町村會の議決を要する。

凡そ納税と兵役は國民の負擔すべき二大義務である。我々は、常に國家並びに地方自治團體の隆昌を思ひ、進んで其の義務を果す覺悟がなければならぬ。

第十六課　水と風景

江山の勝といひ、林泉の美といひ、風光の佳麗なる處、水色の添はざるはなし。

四面海をめぐらせる我が國には、到る處長汀曲浦の眺乏しからず。彼の日本三景を始とし、舞子の濱・和歌の浦・三保の松原等は何れも海濱の勝地として名高く、特に瀬戸内海の風光は世界に冠たりと稱せらる。

琵琶の湖水を外にしては近江八景なく、中禪寺湖・蘆湖を除きては日光・箱根の勝もいふに足らざるべし。中禪寺湖の水は懸つて華嚴の瀧となり、はしつて大谷川となり、綠樹紅葉の間に隱見する所、日光山、林谷の美あり。蘆湖より落つる早川の溪流は、玉と碎け雪を噴き、行く行く浴樓の下を廻りて遊人の耳目を洗ふ。

耶馬溪は奇石怪岩を以て聞ゆれども、山國川の此の間を流れて、淵となり、瀨となり、瀧となりて奇觀を添ふるにあらずんば、いかでか鎭西の絶景たる名稱を專らにするを得んや。木曾山中の偉觀は、老樹の鬱々として晝尙暗きにあれども、木曾川の流るゝありて、其の景に光と色とを與ふるなり。月の瀨の梅も水によりて趣を增し、高雄の紅葉も流に映じて錦を漂はす。

れんげさう・たんぽゝの咲滿ちたる春の野を流るゝ一條の水、竹籬の外より入りて石に隨ひて曲折する庭園の細き流、其の景趣を添ふること幾何ぞ。朝日も、夕日も、

月も、星も、水に映じて美しく、ほたるも水邊に亂れ飛ぶによりて風情殊に多し。

水の豪壯は天をうつ怒濤に見るべく、地を震はす飛瀑に見るべく、岩石を提げてはしる急流に見るべし。平和は洋々たる春の海に在り、岸遠く山遙かにして、白帆風をはらんで下るの長江に在り。靜寂は水面鏡の如くにして、蘆荻岸に疎に、山禽時に來つて翼を洗ふの沼澤に在り。

第十七課　天然記念物

我々の住んでゐる此の地球上には、數限も知れない天然物が存在する。それ等の中には、學問上から見ても、風

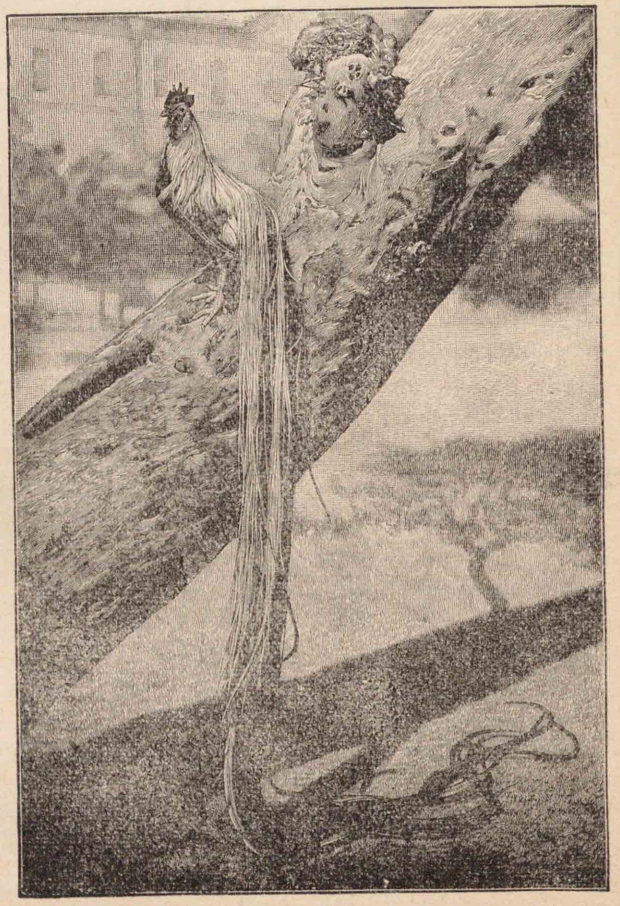
致上から見ても、非常に貴重なものがたくさんにあるが、世の中が開けるに隨つて、其の或物は次第々々に毀損されて行く。今毀損の原因の主なものを擧げてみると、其の物の價値がわからないために、知らず〳〵の間に破壞されることもあり、或は不慮の災害によつて損はれることもあるが、多くは文明の進歩と共に、天然物其のもの、又はそれの存在してゐる土地を利用することが益々多くなるため、又工業の進歩發達につれて、煤煙や有毒瓦斯等の發生が多くなるためである。そこで世界各國では、それ等動物・植物・地質・鑛物等の中で、絶滅に瀕したもの、又は其の代表的標本ともなるべきもの、卽

ち自然界を記念すべきものを總べて天然記念物と稱して、其の保存に大いに力を注いでゐる。

我が日本國は、氣候が比較的溫和で、雨量が多く、國土が寒帶から熱帶に及んでゐる等の關係上、動物・植物の種類が非常に多く、隨つて天然記念物に富んでゐる。これは我が國の誇とするところであるが、今にして保存に力めなければ、終には此の誇を失つてしまふおそれがある。政府もこゝに着目して、大正八年これが保存法令を發布し、其の指定により、着々と保存の方法を講じてゐる。しかしかやうな事は、單に法令の力によつてのみ成し遂げられるものではなく、國民各自がよく其の尊

ぶべき所以を解して、共に力を盡くさなければならぬ。

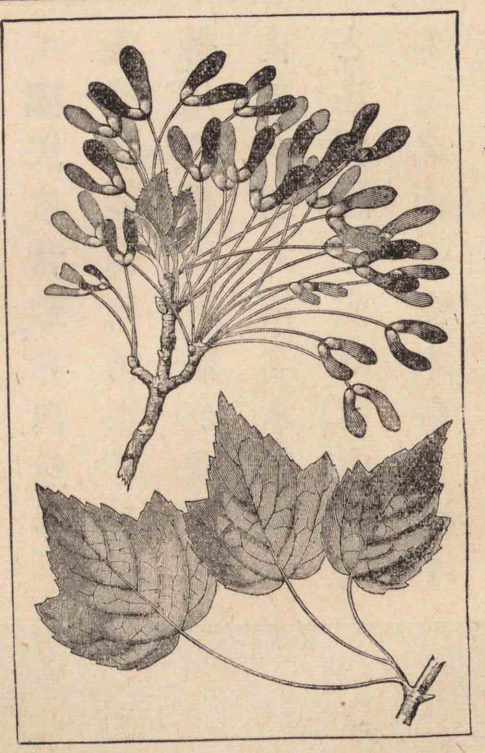
今我が國に於ける天然記念物の例として二三のものを擧げてみると、動物に關するものでは、日本固有の動物たる鹿兒島縣奄美大島のるりかけす・黑兎、或は岐阜縣・岡山縣等に產し、東部アジヤの珍奇な動物として知ら



れてゐる大山椒魚の類がある。又飼育によつて著しい變化を生じた高知縣の長尾鷄などもそれである。其の他特殊な動物の繁殖地又は渡來地としては、青森縣に於けるうみねこ繁殖地、鹿兒島縣・山口縣に於ける鶴の渡來地なども保存の指定を受けてゐる。

植物に關するものでは、社叢の神社の森・名木・巨樹・原始林・珍奇植物・高山植物帶等がある。奈良春日神社のなぎの純林は、社叢の代表的のもの、奈良八重櫻・高砂の松・尾上の松・曾根の松は、或は珍種として、或は樹形のりつぱな點から、名木として保存されてゐる。又鹿兒島縣蒲生の樟は、目通りの周圍七丈五尺に及ぶ日本第一の巨樹である。珍奇植

物の一例としては、岐阜・長野・愛知三縣の縣境附近に產する花の木があり、原始林としては、北海道の野幌、奈良縣の春日山、鹿兒島縣の屋久島等が有名である。其の外、白馬連山にある高山植物帶も、一指定地としてみだりに其の中の植物を採取することを許されない。

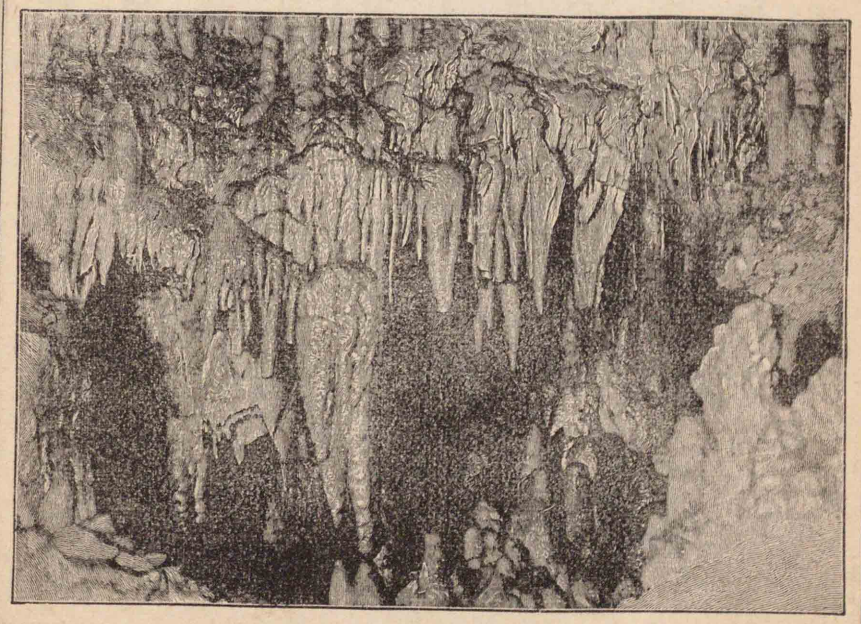


地質・鑛物に關するものでは、山口縣・大分縣に存する鍾乳洞、滋賀縣石山寺にある珪灰石の大露出等が其の例

である。

由來我が國は自然の恩惠に浴することが多く、隨つて國民は昔から自然界を愛護する情に富んでゐる。

徳川時代に、各藩が其の領内の名勝・老樹・名木・岩窟などを保護し、或は留山と稱して名山の樹木を伐採することを禁じたことや、一種の地理書ともいふべき



名所圖會等に、名木・珍獸等を紹介してゐるのでも明らかである。今や世界の國々は、それ〴〵天然記念物の保存に力を注いでゐる。早くより此の美徳を有した我々日本人が、之に對する用意をゆるかせにして、天與の寶を空しく毀損してはならぬ。

第十八課　慈善家キャサリン

十九世紀の初、イギリスのランカシヤにキャサリンといふ婦人あり、家貧しくして、幼き時よりさる貴婦人の許に仕へたり。此の貴婦人は慈善の心厚き人にて、よくキャサリンを教導し、今はの際にキャサリンの手を執りて、「たとへ貧苦の中にありとも、生涯人の爲に力を盡くすべ

し。」と遺言して此の世を去れり。キャサリン時に年十二なりしが、深く之を心に銘し、其の後、或は他家に雇はれ、或は女工となりても、常に此の言を服膺して忘るゝことなかりき。長じて人に嫁し、數年の間に二子をまうけて、漸く家庭の和樂を見んとしたりしに、思ひがけなくも夫は早死し、其の悲しみに加へて、實母さへ明を失ふに至りぬ。斯くて家計は益〻困難に陷りしかども、キャサリンは少しも屈する色なく、釘の製造を職として糊口の資に供し、又草花を市に賣るなど、具に辛苦をなめたりき。されど故なくして他人より金錢の惠を受けたることは、かつて一度もなかりき。

「弱り目にたゝり目」とはこれなるべし。キャサリンの母は精神狂ひて、遂に慈惠院に入れり。キャサリンは己が食を減じて母の嗜好品を贈るなど、千々に心を碎く中、長子は病に罹りて死し、次子亦發狂の氣味ありて、扶養益〻困難を加へたり。かよわき女の手一つにて一家を支へたる辛勞、眞に察すべきなり。

或時、一寡婦の二兒を携へてさまよひ來れるあり。人々は之を顧みんともせざりしが、キャサリンは身の境涯に引較べて同情の念に堪へず、其の長子をば慈惠院に入らしめ、次子を我が家に引取り、其の母にも折々衣食を贈りて、親身も及ばぬ世話をなせり。されど寡婦は世の

義理をも辨へず、恩を恩とも思はぬ仕打多かりしが、キャサリンは敢へて之をとがむることなかりき。

一千八百三十一年、コレラ病の始めてイギリスを襲ふや、蔓延の勢甚だしくして、人々安き心もあらざりき。キャサリンは貧民の爲に力を致さんとて、たらひを貸して洗濯を奬勵し、繩を庭に張りて乾場を造り、專ら清潔と攝生とを諸人に勸めて、豫防の方法を講ぜり。

コレラ病流行の結果、孤兒・貧兒の街上に食を乞ふ者多かりき。キャサリンよりて一婦人と謀りて、これ等の兒童二十人を收容し、日々之に訓話をなし、又音樂を聽かしめて其の心を慰め、ひたすら教養に力めたり。此の企は

後遂に一箇の完全なる孤兒院をなすに至れり。

キャサリンの生涯は感化と慈善とにありき。貧しかりしキャサリンの手に慈善の行はれしは、一に勤儉の賜物なりき。けだし其の最も惜しみしは時間にして、分秒もゆるかせにせず、勞作倦むことなく、秒を銀に化し、分を金に化し、擧げて之を貧しき者惱める者に寄せたるなり。

第十九課　夏の曉

一

殘れる月の　影踏みて、
歌ふ唱歌も　さわやかに、
小川のほとり　牛飼へる

村の男の子が
吹くや朝風
働く身には

二

またゝく星を
露の白玉
向ひの岡に
里の少女が
吹くや朝風
働く身には

三

胸の邊を、
そよ〳〵と。
憂なし。

戴きて、
踏みしだき、
まぐさ刈る
前髪を、
そよ〳〵と。
憂なし。

朝食の煙
仰ぐ日の出の
小牛追ひつゝ
吹くや口笛
生氣溢るゝ
働く身には

四

家路を急ぐ
籠に添へたる
にほへるまみの
足の運も

うちなびき、
麗かに、
歸る子が、
勇ましく、
朝ぼらけ、
望あり。

少女子が、
白百合の、
にこやかに、
いそ〳〵と、

生氣溢るゝ　朝ぼらけ、
働く身には　望あり。

第二十課　鏡

「鏡は一物を貯へず、私の心なくして、萬象を照らすに、是非善惡の姿現れずといふことなし。」

と親房卿はいへり。鏡はもと形を照らす具なれども、やがては心を照らすものともせらる。凡そ人の心は其の面に現るゝこと多し。悲しめば泣き、喜べば笑ひ、憂ふる時は眉をひそめ、怒る時は目を逆立つ。我が感情の激する時、我は自ら悟らねども、他人より見れば、明らかに心の奥の知らるゝぞかし。斯かる折、自ら鏡を取りて照らし見んに、いかでか其の姿の醜きに驚かざらん。古歌に、

鏡には姿ばかりのうつるぞと
思ふ心の恥づかしきかな

鏡は古より女子の魂として、男子の刀に類へ言へり。これ其の姿かたちを整へよといふのみにはあらず、女子は殊に感情の激し易きものなれば、朝に夕に之に向ひて、自ら省みよとの教なるべし。閻魔の廳に淨玻璃の鏡あり、生前の行殘らず之に映ずといへるは、おもしろき佛者の寓言ならずや。常に淨玻璃の鏡に照らさるゝ思もて我が身を慎まば、日々の過は少かるべし。

我が國民の鏡を重んずることは、其の由來甚だ遠し。八

咫鏡（たのかがみ）の三種の神器の一として、伊勢（いせ）の内宮にましますこと申すも畏し。神社の拜殿に神鏡を懸けたるは、太古よりの遺風にて、之に向ひて明く清き心を照らし見んの意なるべし。畏けれども明治天皇の御製にも、

榊（さかき）葉にかくる鏡をかゞみにて
人も心を磨けとぞおもふ

第二十一課　溫泉を問合はす

追ひ〳〵暑さ相加り候處皆々様御障もあらせられず候や先日の御手紙によれば本年より夏蠶も御飼養の由何かと御忙しき御事と察し上げ候さて昨年御目にかゝり候節御近

所にロイマチスに非常にきゝめある溫泉ありとの御話にて御祖母様も度々御出掛けのやう承り候ひしが何と申す處に候や實は母事此の春より急性ロイマチスにて起ち居も自由ならず幸ひ先月半ばより痛みだけは幾分薄らぎ候へども今なほ困り居り候醫師に相談致候處此の病の直り際は醫藥だけにてはは〳〵しくいかぬものなれば湯治が宜しからんと申され候弟も近々學校の方休と相成留守居も出來候につき一日も早く入湯致させたく候間溫泉の場所と然るべき旅館

の名とを御知らせ下されたく願上げ候先づは
右御願ひまでかしこ

年　月　日　　大石とも子

河口よし子様

第二十二課　夕立雲

畠のものも、田のものも、林のものも、庭のものも、蟲も、牛馬も、犬猫も、人も、あらゆる生きものは皆雨を待ちこがれた。

「おしめりがなければ、街道はほこりで歩けないやうでございます。」

と、甲州街道から毎日仕事に來るおかみさんが言つた。

「これでおしめりさへあれば、ほんたうに好いお盆ですがね。」

と、うちの女中もこぼしてゐた。

此の二三日非常に蒸す。東の方に雲が立つた日もある。二三度雷鳴を聞いたこともある。

「今に夕立が來る。」

斯う言つて幾日か過ぎた。

夕飯を早く濟まして庭に出ると、北からひやりと風が來た。目を上げると、果して北に一團の青黑い雲が立つてゐる。其の雲を背にして、こんもりした隣家の杉や樫の木立、孟宗竹の藪などが、濃い綠を浮かしてゐる。

「夕立が來るぞ。」

自分は大聲に呼んで、手早く庭の乾し物・履物などを片付ける。裏庭では、女中が驅けて來て、洗濯物を取入れる。」

やがて妻や子が庭に下りて來た頃は、北の一隅に見えてゐた青黑い雲が、忽ちの中にむら〳〵と湧起つて、濁つた煙色になり、見る〳〵大空をはひ上り、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心に、ずうつと廣がつて來た。

三人は芝生に立つて驚歎の目を見はつて、此のすさまじい雨雲の活動を見た。

青空は今南の一方に押縮められ、煤煙の色をした雲の大軍は、其の青空をすら餘さじものをと、南を指してひ

た押しに押寄せてゐる。ついに今しがたまで雨を戀しがつてゐた大地のあへぎは何處へ行つたか、唯十分か十五分の中に世界は恐しい雨雲の下に閉込められて、冷たい暗いものとなつた。

雲の運動は秒一秒劇しくなつた。南を指して流れる雲、渦卷く雲、じつと止つて動かぬ雲、雲の中から生まれる雲、雲をかすめて移り行く雲、濃くなり、淡くなり、濃くなり、北から東へ、東から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙突といふ煙突から限なく湧く煤煙を此處に集めたやうに、目を驚かす雲の大行軍、音を聞かぬが不思議である。

我等は驚異の目を見はつて、此の活動する雲の下に、魅せられたやうにたゝずんだ。冷たい風がすうつ〳〵と顔に當る。後れ馳せに雷がそろ〳〵鳴り出した。北の方で、赤や紫の電光が時々ぱつ〳〵と半天を照らしてひらめく。近づく雷雨を感じつゝ、我等は猶頭上の雲から目を離し得なかつた。うすぎたない煤煙色をした滿天の雲は、益〻南へ流れる、水のやうに、霧のやうに、煙のやうに。空は皆動いてゐる。廣い空のどの一寸四方でも、動いてゐないところはない。皆恐しい勢を以て動いてゐる。仰ぎ見る我等は、流れる雲に引きずられて、やゝもすれば驅出しさうになる足を、踏みしめ〳〵立つてゐなければならなかつた。

時々西の方で、或一箇所雲が薄れて、探照燈の光めいた生白い一道の明りが斜に落ちて來て、深い〳〵井戸の底でも照らすやうに、我等と足許の芝生だけを明るくする。我等ははつと驚の目を見合はす。と思ふと、もう眞暗になつてゐる。妻や子の顔は土色になつた。草木も人も息を潜めたかのやうに、一切の物音は絶えた。何處から來たか、犬のデカが不安な目つきをして見上げつゝ、大きな體を主人の脚にすりつける。

空はとう〳〵雲に包まれてしまつた。著しく水氣を含んだ北風が、ぱつ〳〵と顔を打つて來た。やがて大粒の

雨が來た。雷も頭上近くなつた。雲見の一群は急いで家にはいつた。おも屋の南側の雨戸だけ殘して、悉く戸をしめた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降出した。雷が鳴る。庭中の雨脚をすさまじく見せて、ぴかりと電が光る。

見る〳〵庭は川になる。雨が飛石を打つてはねかへる。目に入る限の青葉が、一葉々々に雨を浴びて、嬉しさうにぞく〳〵身を震はしてゐる。

「あゝ好いおしめりだ。」

斯う言つた我等は、更に

「まだ七時前だよ。まあ。」

といふ女中の聲に驚かされた。

夕立から本降になつて、雨は夜すがら降つた。（德富健次郎「みゝずのたはこと」ニ據ル）

第二十三課　地震

地震の起るのは種々の原因によるが、一口にいへば、地殼を構成する物質が、久しい間蓄積せられた壓力に堪へきれなくなつて、急激な變動を起すに基づく。此の變動が波動となつて四方に廣がる現象を、地震といふ。

地震中大規模のものには、いはゆる斷層地震が多い。これは變動と共に、新に斷層を伴なひ、或は既成の斷層に移動を起すものである。さうして是等の變化は、實際に

地表面にまで及ぶことも少くない。明治二十四年の濃尾地震、同三十九年のアメリカ合衆國サンフランシスコ地震等は此の種の適例である。

火山が爆發する時も、其の勢力の一部分を以て四圍の地に激動を與へ、地震を起すが、其の震動は極めて小さい。之に反して、爆發に伴なふ空氣の波動は、四百キロメートル餘の遠距離までも達して、家屋を振動せしめることがある。明治四十二年に於ける淺間山の爆發などはこれである。又火山の破裂に前後して、多くの地震を起すことがある。これは大地震ではないが、それでも粗造の構造物は、時として多少の損害を被ることがない

ではない。明治四十三年の有珠山噴火に先だつて起つた地震や、大正三年の櫻島噴火後の地震などはこれである。

或地方で地震が起らうとする前には、其の附近の地殼は既に極めて不安定の狀態にあるのであるから、地表面上に影響する外力の變化に伴なつて、活動を始めることが往々ある。外力とは、大氣の壓力、雨雪、潮汐等のことであつて、是等の變化は、地震の誘因ともいふべきものである。

地震は地下に存する弱點を除去するものであるから、一度大地震の起つた後には、引續いて同一中心地から、

更に大破壞的地震の起ることはないわけである。又餘震は時としておびたゞしい數に達することがあるけれども、其の破壞力は、普通最初の地震の十分の一以下のものである。且此の餘震があるために、地殼は再びもとの安定の狀況に復することが出來るのであるから、却つて喜ぶべき現象といはねばならぬ。

地震動の强弱は、地震の大小と震原の遠近によつて違ふけれども、其の土地の地質狀態及び地形に關することも少くない。例へば斷崖・河岸等では、常に其の震動が他よりも大きい。又岩石や赤土の固い地盤では震動は弱いが、泥又は砂地であつたり、埋立地のやうに土質の

柔い場所であると、震動が非常に强く、時によると、水や泥砂を噴出したり、地割れを生じたりすることがある。」地震の震動は、普通斜に往復運動をするものである。故に地上の物體は、上下にも水平にも動くことになる。但し震原に近い處では上下動が著しく、震原から遠ざかるに隨つて水平動が主となり、上下動は減じて行く。被害の程度は勿論震原に近い程甚だしい。

我が國には古來地震が極めて多く、大地震も少くないが、家屋は大抵輕い木造であるから、死傷者は割合に少い。去る大正十二年の關東大地震は、東京市内の死亡者だけでも約六萬、實に空前の大慘事といはれてゐるが、

それでも直接地震のために壓死したのは、僅かに其の百分の一强で、大部分は地震によつて起つた火災のために死んだのである。

斯ういふ風に、我が國の家屋は地震に對して比較的危險が少いから、地震の際にも決して狼狽してはならぬ。勿論容易に屋外の安全地に逃げることの出來る場合には、早く戸外に出る方がよいが、若し途中危險な處を通らねばならぬとか、逃出しても避難すべき場所の無い場合には、寧ろ屋内に止つて、丈夫な机や寢臺の下などに身をよせてゐる方がよい。殊に木造の二階建では、たとひ階下がつぶれても、二階はつぶれない場合が多

いから、二階に居て地震に會つても、あわてて飛下りるやうなことをしてはならぬ。又一旦屋外に出たならば、屋根から落ちる瓦や、石垣・煉瓦塀などの崩れるために負傷しないやうに注意し、避難地が海岸や谷間であつたら、津浪や崖崩等についても用心しなければならぬ。

以上は火災の恐のない場合であるが、若し火を使用してゐた際ならば、何よりも先づ火の元に注意して、火事の起らぬ用心をすることが肝要である。木造家屋の多い我が國では、此の注意を怠ると、思ひがけない大慘害を招いて、經濟的にも精神的にも償ひ難い損害を被ることになる。

第二十四課　月見草

月見草は私の好きな花の一つである。黄といふ色は自分の特に好きな色ではないが、あの花の清新な鮮かさと、其のはなびらの柔かさと、又夕暮や曉のすがくしさとは、月見草のほのかな黄色を言難く懷かしいものに思はせる。

自分は、一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗い中に停車場前の旅館を出て、同宿の友と程近い野原を歩いた。曉に近いので、いくらかしをれかゝつてゐる月見草が、限もなく咲續いてゐる上を、山霧が一面に流れてゐた。自分たちは言

葉少に並んで歩きながら、何ともいへずしんみりした氣持になつて、また旅館に歸つた。

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを目のあたり見た。食後二階の欄干に倚つて何心なく庭を眺めてゐると、月見草のつぼみが急にふくらんで行くやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開く音を聞いて悟をひらいたといふ話を微かに想ひ起しながら、急いで庭に出て、月見草の傍にしやがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐるつぼみの幾つかがある。最初にはなびらを包んでゐる蕚が開く。蕚が開くと、はなびらが次第にふくらんで來て、

不意に一片が急にはじける。さうすると、四つのはなびらが一しよにふうわりと開いて來て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。其の咲始にほのかな香氣が鼻をうつ時の氣持は、何ともいはれない。明日の朝になればしぼんでしまふはかない花だけに、咲く時の清新な趣は格別なのかも知れない。

私のやうな者には、月見草の咲くのを見ても、固より悟は開けない。しかし新しく咲く花を見守る靜かな心は、誠に尊いものである。（阿部次郎「北郊雜記」ニ據ル）

第二十五課　日本の風土

試みに大日本全圖に向つて、帝國領土の廣がりを見よ。

樺太・千島・北海道・本州・四國・九州・琉球・臺灣の島々は、東北より斜に長く西南に連なり、最南の臺灣の一部は既に熱帶の内にはいつてゐる。又朝鮮は滿洲及びシベリヤに接して、アジヤ大陸の一部分である。されば地方によつて氣候に甚だしい差異があり、生物の種類も頗る多い。

寒地から熱地へ、熱地から寒地へ渡る禽鳥で、我が帝國の領土を過ぎて翼を休めるものは少くない。鶴の群はシベリヤ方面から飛んで來て、ほがらかな聲を朝鮮の空に響かし、鷺は熱帶地方から飛んで來て、一望十里の青田に下立つ。獸には象や犀・獅子などこそ居ないが、野

獸に家畜に其の種類はかなり多い。植物も亦豐富で、春は櫻、秋は花よりも美しい紅葉が、松・杉・檜などの常磐木の間を點綴してゐる景色は、獨り我が國に於てのみ見られるのである。

本州全體は溫帶の中部にあり、氣候は概ね溫和で、土地も豐饒で、水蒸氣も多量であるから、到る處植物がよく繁茂する。冬季には北西の風が多く、夏季には南東の風が多い。春季から夏季に移り變りの際には、氣壓配置の變化に伴なつて、陰雨連日にわたり、いはゆる梅雨をなす。我が國の米產國であるのは、實に此の梅雨に負ふ所が多い。又冬季には、アジヤ大陸から吹いて來る北西風

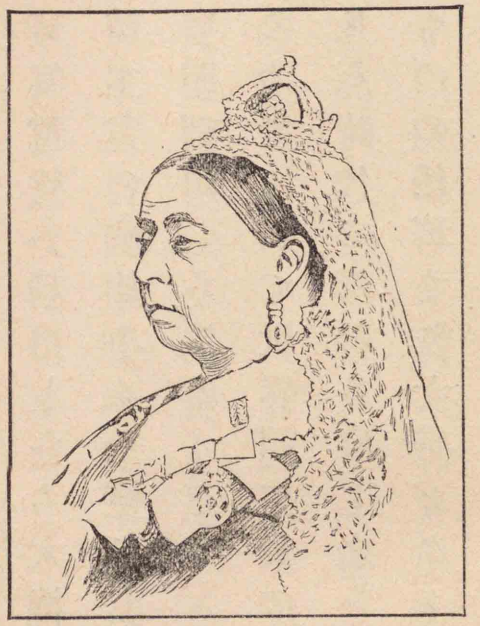
が、日本海上の水蒸氣を運び來つて、本州の中央に連なる山脈に吹着ける。それがため凍雲日光をさへぎり、降積る雪は北陸・山陰の地を銀世界にする。由來太平洋岸と日本海岸は種々の點に於て相反するが如く、晴曇に於ても全く趣を異にする。冬季、上・信・越の境にそびえる三國峠に立つて北方を望めば、密雲層々空を覆ふに、南方を顧みれば、一天片雲なく、まばゆき日の光が山岳・原野を照らして、數十里の風光が一望に入るのに驚くのである。

火山脈は本州を縱斷橫斷してをつて、昔から三國一の名山と稱へた富士山を始め、磐梯山・赤城山・榛名山・淺間

山・立山・白山等の山々、現に噴火してゐるものもあり、今は噴火してゐないものもあるが、其の變化に富んだ山容は、風景の美を添へることが多い。然も外國の火山の如きはげ山は少く、何れも綠樹鬱蒼として、其の中腹又は麓には火山湖や溫泉が多い。斯くの如き山脈によつて分たれた地勢は、もとより茫々たる大平野をなす餘裕が無い。隨つて川には長流が少く、急流奔馬の如く、直ちに走つて海に入るものが多い。

第二十六課　ビクトリヤ女帝

イギリスの女帝ビクトリヤの生まれしは西曆一千八百十九年にして、汽船の始めて大西洋を横ぎりし年なり。一千八百三十七年、十九にして皇位に登り、一千九百一年、八十三の高齢にて歿するまで、其の治世六十五年間は、イギリスの國運旭日昇天の勢を以て發展し、遂に前古未曾有の隆昌を極めたる時代なりき。



ワーテルローの戰爭に於てナポレオンの一敗地に塗れしは、女帝誕生の年に先だつ四年なり。イギリスは國民の冒險と勇敢と勤勉と忍耐とを以て、數百年の間に廣大なる領地を拓きたりしが、今や此の戰により、一

躍してヨーロッパの最強國となれり。ビクトリヤ女帝は、生まれながらにして此の強國を統治するの幸運を得たり。又第十八世紀の終より第十九世紀にわたりては、蒸氣・電氣を利用したる大機械の發明頻々として現れ、商工業の狀態全く一變せしが、是等の機械を最も多く發明利用したるはイギリス人にして、イギリスは女帝の治世に於て、世界商工業の覇權を握るに至りしなり。」凡そ時代の形勢を察し、之を善用利導するは、君主たるものの任務なり。女帝ビクトリヤの此の大任に當るや、よく賢相の言を容れ、施政宜しきを得て、あつぱれ明君の譽を四海に專らにせしは、誠に其の英明なる天資と、

國利民福を思ふの至誠とに依らずんばあらず。女帝は常に其の天與の大任を重んじ、寸時も國政を忘れず、大小の政務一々其の利害得失を究むるに非ざれば、裁可を與ふることなかりき。彼の外交事件の最も紛雜を極めたりし一千八百四十八年の如きは、二萬八千通の外交文書を一々閲覧したりといふ。

一千八百四十年、齡二十二にして、ドイツよりアルバート公を迎へて皇婿となし、四人の皇子と五人の皇女とを擧ぐ。第一は皇女にしてドイツ帝フリードリヒ三世の皇后。第二は皇子にしてイギリスの皇位を嗣ぐ。エドワード七世是なり。其の他の皇子・皇女、何れも王公の家

を保ち、皇室の繁榮、國家の隆盛と相伴なへるは、誠に多幸多福なる生涯といふべし。

女帝は、溫容玉の如き中に侵すべからざる威嚴を具へ、貞淑にして慈愛の心厚く、常識に富みて能く下情に通じ、文學・音樂の造詣も淺からず。又數箇國の國語に熟達し、印度語をさへ學べりといふ。

第二十七課　罐詰

食物の腐敗を防いで長く貯へておくにはいろ〳〵の方法があるが、最も完全なのは罐詰にすることである。「物の腐敗するのは細菌の作用によるのであるから、細菌が附着しないやうにすれば、腐敗は防げるわけであ

る。罐詰は實に此の理によつて作つたもので、罐の密閉によつて外界との接觸を斷ち、熱を加へて罐内の細菌を死滅せしめるのである。斯うすれば、「蒔かぬ種は生えぬ」理によつて、罐内に細菌が發生することはないから、内容物は腐敗する憂がない。

罐詰には、魚肉や獸肉のもあれば、野菜や果物のもある。其のまゝ食用になるやうに調味したものもあれば、調理の原料とするために水煮にしたものもある。罐詰の種類によりそれ〴〵其の製造法に多少の差異はあるが、大體の工程は皆同樣である。中でも鮭や蟹は、一時に多量の漁獲があり、又之を手早く處理しなければなら

ぬ必要があるので、是等の罐詰工場は、規模が頗る大きく、又設備もよく整つてゐる。今鮭の罐詰製造の有樣を述べてみよう。

陸揚された無數の鮭は、自動運搬機でどし〳〵と工場に運ばれ、先づ第一に調理機にかゝる。此處で頭・尾・鰭は切取られ、内臓は取除かれ、更に冷水できれいに洗はれる。これだけの作業は一臺の機械で行はれ、然も一分間に優に六十尾の鮭を處理する。第二の機械は魚肉切斷機である。此處で罐の大きさに切斷された鮭の肉は、次の肉詰機に移され、少量の鹽を加へて罐に詰められる。次は此の罐に蓋をするのであるが、最初から蓋を固く

締めてしまふと、後に蒸釜に入れて加熱殺菌する際に、罐内の空氣が膨脹して罐をいためる恐があるから、先づ假締機にかけ、蓋を緩く締めて、次の脱氣函に送る。脱氣函の内部は常に百度ぐらゐの溫度が保たれてをるから、假締のまゝ此の中に十五六分も入れておくと、罐内の空氣は膨脹して、大部分蓋の隙間から脱出する。そこで之を本締機にかけ、蓋を締めつけ、密閉してしまふ。密閉した罐詰は、次の蒸釜に入れ、熱を十分に加へて殺菌する。こゝで肉も完全に煮沸されるのである。此の外に、物によつては、初から本締にして蒸釜に入れ、罐に穴をあけて空氣を拔き、後から其の穴をふさぐ方

法もあるが、それは空氣と共に肉汁等が流出することなどもあつて、完全な方法とはいへない。

完全に製造された罐詰は、かなり長い貯藏に堪へるものである。かつてイギリスの北極探檢隊が極地に於て拾ひ取つて來た罐詰を、博物館に陳列しておいたが、七八十年たつて、試みに蓋を開いてみたら、少しも腐敗してゐなかつた、又難破船から漂着した罐詰を、其の後五十年もたつて明けてみたら、なほ十分食用に堪へたなど、いろ〳〵のおもしろい話が傳へられてゐる。しかし罐詰にも時々不良の品があるから、よく注意しなければならぬ。罐をたゝくとかち〳〵と固い音を發するのは良い罐詰であるが、之に反して、ぼこ〳〵と空虛な音を發するものや、蓋や底がふくれ上つてゐるのは、不良な品である。これは殺菌が不十分であつたり、又は罐に疵があつて、其處から細菌が侵入したりして、中身が腐敗し、瓦斯を發生したものである。次に、罐詰は蓋をあけたならば、直ちに之を他の容器に移し、なるべく早く食べてしまふがよい。

第二十八課　落日

一

野は里は　たそがれ初めて、
連なれる　山のいたゞき、

かゞやかに　光にほへり。

二

あや雲の　波漂ひて、
大いなる　くれなゐ色の
燃ゆる日は　今し落行く。

三

言葉なく　眺めてあれば、
我が胸の　奥にぞ通る、
落つる日の　尊き光。

第二十九課　待賢門の戰

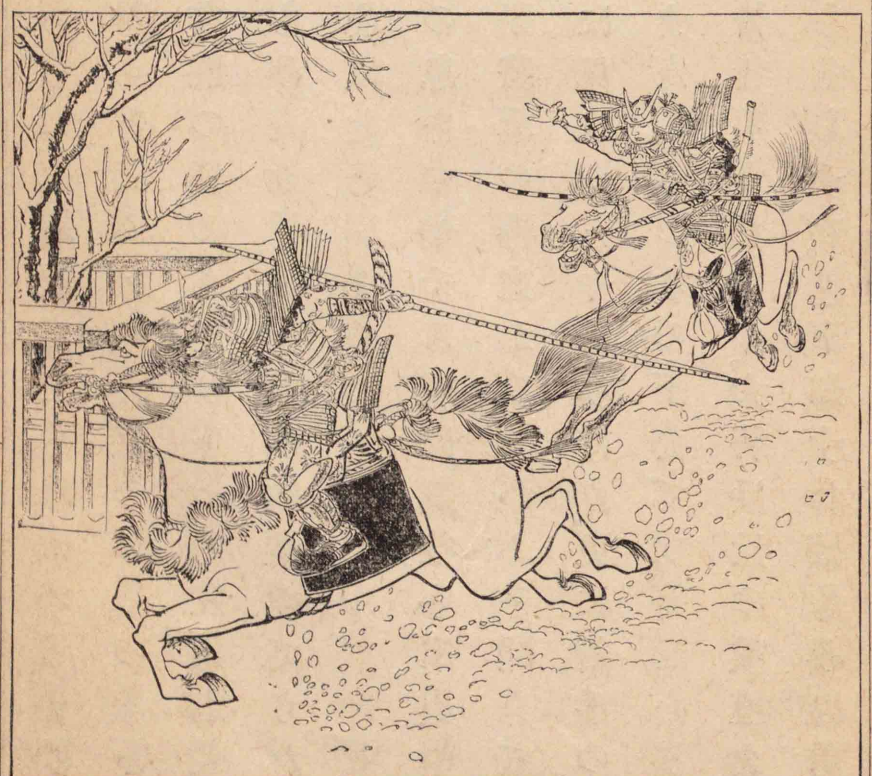
左衞門佐重盛、討手の大將を承つて言ふやう、「年號は平

治なり、都は平安なり、我等は平氏なり。三事相應ぜり。敵を平げんこと何の疑かあるべき。」と、三千餘騎を三手に分け、陽明・待賢・郁芳の三門に押寄せたり。源氏方には、三門をさし堅めて、大庭に馬ども多く引立て、用意をさをさ怠なし。

重盛は、手兵五百餘騎を率ゐて、信頼が守れる待賢門に向ひ、大音聲に呼ばはりけるは、「此の門の大將軍を、信頼卿と見るはひが目か。斯く申すは桓武天皇の後裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衞門佐重盛。生年二十三。」と名乘りかくるに、臆病なる信頼、返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將退却すれば、防ぐ侍一人もなし。我先に

と逃げければ、重盛愈勇みて、大庭のむくの木の下まで攻めつけたり。義朝之を見て、「惡源太は無きか。信賴といふ大臆病人が、待賢門を早破られつるぞや。あれ追出せ。」と呼ばはりければ、惡源太義平、「承り候ふ。」とて驅出でたり。續く兵には、鎌田兵衞・後藤兵衞・佐佐木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫、以上十七騎、くつばみを並べて馳向ふ。

惡源太義平、大音聲を上げて、「此の手の大將は誰人ぞ。名乘れ、聞かん。斯く申すは、清和天皇九代の後裔、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉の惡源太義平。生年十五歲の初陣より、度々の合戰に一度も不覺の名を取らず、年積りて十九歲。見參せん。」とて、五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縱橫橫樣十文



字に、敵をさつとけちらして、「端武者どもには目なかけそ。大將軍を組んで討て。」といふく、大庭のむくの木を中に立て、左近の櫻、右近の橘のあたりを七八度追廻して、組まんくとぞもみたりける。十七騎に驅立てられて、平家の五百騎、かなはじと引退く。

重盛弓杖ついて馬の息をつがする所に、筑後守家貞つと參りて、「あつぱれ、平將軍の再來かな。」といふを聞きて、今一度驅けて家貞に見せんとや思ひけん、更に新手の五百騎を引具して、またむくの木の下まで攻寄せたり。惡源太驅向ひ、「兵は皆新手なれども、大將は元の重盛なり。此の度こそは討ちもらすな。」と下知すれば、勇みに勇

みたる十七騎、我先にと進み出づ。惡源太弓をば小脇にかいはさみ、鐙踏張り突立上り、「我も源氏の嫡男なり。御邊も平氏の嫡男なり。よき敵ぞ。寄れや、組まん。」といふまに、さきの如くむくの木の下を追廻して、五六度までももみたりけり。重盛またもかなはじと、門を出でて引退く。惡源太二度までも敵を追ひまくり、暫し馬に息つがするを、義朝遙かに見て、「汝が不覺に防げばこそ、敵度度驅入るなれ。あれ追出せ。」と言ひやれば、義平聞きもあへず、「承り候ふ。進めや、者ども。」と、十七騎共に討つて出で、敵五百騎が中へ面もふらず割つて入る。浮足立つたる平家勢、馬の足を立てかねて、逃行く樣ぞ見苦しき。義朝

之を見て、「我が子ながらも、義平はよく驅けたるものかな。あ、驅けたり。」とぞほめたりける。（「平治物語」ニ據ル）

第三十課　興國の民

元氣旺盛にして進取の氣象に富み、目的の存する所、必ず實行の計畫あり。

思慮周密にして決斷力に富み、計畫一度定まれば、直ちに之に着手し、勇往邁進、成功を見ざれば止まず。

活動を以て無上の樂しみとし、安逸を以て最大の苦痛とす。獨り自ら活動するのみならず、又能く人を活動せしむ。

自信の念篤く、自立自營、他を羨まず、他に依賴せず。

前途に希望を有して、人生を悲觀せず。不幸に遭遇するも落膽することなく、必ず新進路を求めて、運命の轉廻を圖る。

遠大の志望を抱きて、能く艱苦と戰ひ、終局の勝利を期待して、自彊息むことなし。

虛名を卑しみ、實功を貴びて、華を去り、實に就く。

義務の觀念强く、職責を重んじて、忠實業に服す。

己を持すること謹嚴、公德を重んじ、規律を尊び、高雅善美なる嗜好を有す。

氣宇闊大にして、人を容るゝの量あり。能く他國民と親和し、又能く之を同化す。

公平無私、能く事物の長短を識別し、我が短を捨つるに吝ならず、他の長を採るに敏なり。

協同一致の精神に富み、團結の力強く、公益の爲には私情を去り、私利をなげうつ。

行住坐臥、國家を思ひ、事を處する、必ず至誠奉公の精神に基づく。

高等小學讀本　女子用　卷三　終

昭和二年三月十日翻刻印刷
昭和二年三月廿六日翻刻發行

高等小學讀本卷三女子用
定價金拾錢
ろ

昭和二年三月十二日
文部省檢査濟

著作權所有

著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社　代表者　石川正作

印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社工場

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社

文庫
0
927
0487
広島大学図書
2000080487